

## 恍惚感? を生み出す×××に魅了されたあの日

パウル・ヨゼフ・ゲツベルスの名を聞いたことがあるだろうか。彼は第二次世界大戦中、ヒトラー率いるナチス・ドイツの宣伝相として活躍した人物である。

彼の演説の仕方は、最初にモゾモゾと何を話しているのか分からないように話し、段々と抑揚を上げて、最後は聴衆と一体感を作り、「悦」の世界に入っていくやり方である。この話し方の基本は演説者が声や音量を小さくして話す、そうすると聴衆は「このすごい人は何を話しているのだろう」と興味を持つ、その後話の本質の部分は声を大にして言うと、聴衆がより興味を持ってくれると言うわけだ。

さて、この同じような話し方を第2回本誌全国大会が行われた3月1日に聞くことになってしまった。その聴衆を魅了する話をされた御本人は、**松尾雅彦**・カルビー(株)相談役だった。

この全国大会に出席を決めた理由のひとつに、ポテトチップで国内の圧倒的なシェアを持つカルビーの考え方や成功企業としての基本姿勢を学びとることは、農業生産者として絶対的な利益を与えてくれると信じ

ていたからだ。

松尾さんは自己紹介から始まり、バレイシヨの話になると、やはりゲツベルスのように肝心な部分は明確に話をされなかったこともあった。

そうになると、会場ではこのカルビーの重鎮は何を話しているのだろうと、より神経を集中することになり、最後は松尾マジックにのめり込むことになる。

誤解のないように補足させていただが、松尾さんをナチスのゲツベルスと同列で表現したいわけではない、もし同じ時代の第32代フランクリン・ルーズベルト米国大統領

と同じ話し方だと言ってもピンと来ないだろうし、ハワイ出身の第44代バラク・オバマ大統領のようにあえて南部黒人と全く違う語尾にアクセントを置く話し方のように、表現の仕方や話し方の勉強もコミュニケーションの一部ということである。また「**稼ぎ**」と「**勤め**」の違いなどは、自分の生き方を確認するために動を止め、静を外から見直す良い機会を与えていただいた。

# 勤めと稼ぎ、 Vol.15 ワインとじゃがりこ



**宮井能雅**  
1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

ただヨーロッパ・テイスト(好み)がない私なので、イタリア農業の話を読んだ時は大嫌いな、実際に経験した有機ぶどうジュースを飲んで体にブツブツが出てしまうくらい危険と考えている有機農産物の話や自給自足を目指すスローフード推進話が出るのかと想像した。しかし、よく聞くと、もっと癖の悪いグリーンソーリズムのグリーンだ

# オレにも 言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

けではだめだと、結構マトモなことを話され、カリフォルニアではワイナリー（農場）も世代が変わればポトルと同じ様に商品になるのだと発言されてからは「さすが、この爺さんそこそこ分かってるな」と勝手に解釈してしまった。

本州のみならず、この北海道でも先祖伝来のこの土地を勝手に処分する、つまり売買することはまかりならん、なんてことが言われているということがあると以前にも書いた。

戦後の農地解放で、農地の耕作権だけ与えておけばよかったものを、農地の90%以上の土地そのものまで与えたGHQの英断は未来永劫、日本の教科書に書き継がれる。北海道でも自民党を支持するがイノベーションを嫌い、もしくは理解できない日本共産主義で教育を受けた子供たちが日本の行く末を作るのだから。事実、自分の子供たちが短期で通う公立学校新年入学式では君が代を校長だけが歌い、先生、生徒、もちろん父兄も口パクさえしない状況を何とも思わない精神的ハンディキヤッパがほとんどだ。戦後20年で旧小作人はほとんど都市に吸収されて、「消費者」として君臨する名誉を国家からいただいたが、彼らが農業生産者から離れ非生産主体の都会人になっても、農業の良き理解者

であるかどうかとは別の話だ。GHQが望んだ、旧小作人の子孫で親米主義者が、現在の日本には存在しないということを知ったら、故マッカーサー元帥もさぞかし草葉の陰でお嘆きのことだろう。そうなる」と「日本農業は大切である」と主張し、2兆5000億円の予算付けに満足せず、1兆円の補正予算を組む農林水産省の存在感は、大切にしていかねばならない。聞くところによると本州の旧小作人さんの土地は売買しても、猫の額ほどの面積だったので、後生大事することになり、売買の時は先ほどの決まり文句である「先祖伝来のこの土地」のフレーズがゾンビのように生き返ると香川県生まれの母から聞いた。

一番進んだ国だからインフレがぶくもがあるのだから

ワイン話で面白い映画を見た。「ポトル・シヨック」を見た方はいらっしゃるのだろうか（編集部註・日本未上陸）。儲かっている生産者はボーイング777機上の座高176度になるシートに備え付けられているモニターでこの映画を見ることが出来る。米国のノースウエストのこのようなシートに座ると「ワインはいかがですか？」と尋ねられる。「何があるの？」と聞くと「シ

ヤルドネがお薦めです」と必ず言うてくる。酒を嗜まない私でも確かに口当たりがよく、癖のない味というくらいは分かる。さて、映画の内容は1976年にパリ・ワインティステイニング（ポトルの目隠し審査）で米国のカリフォルニアワインが1位になった。この年は米国独立200年であり、最後にその後30年経った2006年にもカリフォルニアワインが優勝したことを伝える、半分コメディタッチの作品である。

現在でもたった1500円のカリフォルニアワインのシャルドネが5000円の、本場おフランスワインに勝つのであるから、歴史を大切にすることは面白くないのだろうか。よく考えれば米国がフランスに負ける理由は何もない。どこかの誰かが勝手に、「おフランスはすごいぞまゝ」と言っているだけだ。それに先月号でも書いたが、フランス人が日本人を騙すことがあっても日米安全保障条約を締結して、その行為を日本国憲法第98条で保障された米

国が安ワインを日本人に不当に高く売りつけるなんてことをピューリタンの国、米国人がやる教育を受けていない。話は変わるが、個人的には本誌全国大会で「稼ぎま賞」があつたら、近い将来カルビーと何かしらの

契約が期待できる(有)アグセス・岡本信一さん（編集部註・今月号視点にも登場）に差し上げたい。彼は土壌分析を通じて生産者に利益を還元すると発言した。多分それを聞いていた関祐二さんは「それ以上しゃべるなよ!」と思われただろう。なぜなら土壌分析をして、適切な肥料設計でより多くの農産物が収穫、販売されることは1人の生産者のみならず、地域や国家の利益になると考えるからである。この私も米

国に土を送りヤンキーにコンサルタン

トを依頼しているが、その結果、化学肥料は200万円削減、収量は地域の上位を占めることができる。となるとなぜ本誌の読者の皆さんは10年以上コラムをお持ちの関祐二さんや岡本信一に相談に行かないのか？投資が必要だから？  
これだからケチィー、ナニの小さい男は女にモテないのだ。当たり前であるが投資をしないでリターンが存在する社会ではないことくらい日本共産主義を学んだみなさんでもご存じのはずだ。儲けてなぜ悪い？ 儲けた上で適切な税金を国家に支払い176度どころか、180度の個室付きシートの飛行機でじやがりこをつまみながら奥さん、子供たちと米国に行こう！と言う生産者はいないものか。